

# 山口県史だより

第26号 / 平成21年12月

特集 幕末維新时期における民衆意識



ふるたにどうあん  
古谷道庵も見た海の風景（下関市豊浦町宇賀本郷）

## 特集 幕末維新期における民衆意識

昨年、NHKの大河ドラマ「篤姫」が話題となりました。幕末の人々の生き方はとても興味深いものです。幕末の史料から読みとれる民衆の意識や行動は、私たちに、現代社会を生きるヒントを与えてくれるような気がします。

### ■時代のうねりの中で

安政元年（一八五四）の開国以降、経済混乱と外圧に対する危機感、外国への反感を高め攘夷運動の激化を招きます。

また、人々の生活が、天災などに大きな影響を受けた時代でもありました。安政年間は大地震が頻発しました。特に、安政二年には、江戸が大地震で壊滅的な被害を受けます。江戸では、地震直後から瓦版の鯨絵（写真1）が人気を博しますが、そこには、天災への不安と救済や復興に世直しを期待した民衆の願いを感ずることができます。

### ■幕末の長州

文久三年（一八六三）長州藩は外国船を砲撃するなどして攘夷を執行します。翌年には、禁門の変（蛤御門の変）、四国艦隊下関砲撃事件、第一次長州出兵によって、幕府への恭順を誓うこととなります。しかし、慶応元年（一八六五）、高杉晋作らのおこした内戦により藩論を転換（武備恭順）した長州藩に対して、再び幕府により征長命令が出され、慶応二年、幕長戦争（四境戦争）が始まります。

この戦いは、大島口（写真2）、芸州口、石

州口、小倉口で展開されますが、幕府方は、動員された軍夫の逃亡などもあって、いずれの方面においても敗戦を重ねていきます。ここでも民衆の行動や意識が、戦争に大きな影響を及ぼしたようです。

### ■歴史の息づかい

古谷道庵は、現在の下関市豊浦町宇賀本郷で地域医療や教育に尽力した人で、天保七年（一八三六）から明治十一年（一八七八）までの日記を残しています（『古谷道庵日乗』下関市教育委員会蔵）。

この日記には、日常の近所の人たちとの交流や生活の様子だけでなく、長州藩にも及んだコレラの流行や、開国後の物価高を外圧と結びつけてとらえている民衆の様子が記されています。また、攘夷決行や四国艦隊下関砲撃事件の際の下関の緊迫した状況、池田屋事件や禁門の変など京都の政情の伝聞までが書き記されています。道庵は、自分の眼下に広がる海（表紙写真）に、異国の蒸気船が行き交うのを、どのような気持ちで見ていたのでしょうか。書き残された日記などには、その時代を生きた人々の「息づかい」を感じるものがあります。

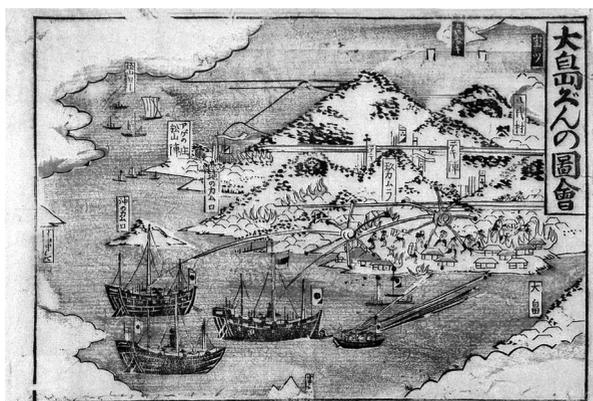


写真2 四境戦争図 大島ぐんの図会  
（山口県立山口博物館蔵）



写真1 鯨絵（筑波大学附属図書館蔵）

## ■長州びいき

『吉介翁自筆見聞雜記』(西川家文書・滋賀大学経済学部附属図書館蔵)は、近江(滋賀県)の商人で国学者の西川吉輔が書き記したものです。慶応元年の長州藩への再征の命令に伴う幕府の動員に対して諸藩は消極的であったこと、長州藩の巧みな外交戦略による戦闘開始の引き延ばしや秘密盟約とされた「薩長同盟」の動向、西郷隆盛や坂本龍馬などの勤王の志士の名も登場します。また、兵が結集したものの戦闘開始の引き延ばしによって治安が悪化した、当時の京都、大坂などの様子がリアリティをもって記されています。



写真3 長州萩藩蔵屋敷跡 (大阪市西区土佐堀)

また、禁門の変で敗れた長州藩兵が逃走中、尼崎で捕まり自刃しますが、その墓に御利益を期待した参詣が大流行したこと、周辺には出店もでき、渡し船が沈むほどの人出であったこと、大坂の長州萩藩蔵屋敷(写真3)の柳の木を煎じて飲むと病気が治るといわれ、その木への参詣が流行したことも記されています。

「長州踊り」(長勝踊り)の記事には、その始まりに関する噂や踊りに必ず着用する長州産の縮木綿などが京都、大坂の呉服屋で品薄になるほどであったことも記されています。

慶応元年、播磨国美囊郡三木(兵庫県三木市)で「稲荷踊り」(長勝踊り)が流行したことは、幕長戦争時の浜田藩(島根県)の記録『征長一件』(山口県文書館蔵)にも記され、その踊りの様子も描かれています。(写真4)民衆は様々な行動で長州藩や勤王の志士たちへの共感を示しつつ、反幕府勢力支持を表したようです。(写真5)

## ■現代社会と幕末維新

幕末期には、天災や疫病、外圧による開国や政局の混乱の中で、「鯨絵」、「長州びいき」、よく知られる「ええじゃないか」の民衆乱舞、その他様々な「民間信仰」など「頼れるもの」を求める民衆の行動、意識がみとれます。

この民衆の行動や意識が、当時の口コミのネットワークによって、我々の想像以上に広がりをみせ、社会を動かすうねりの一つになっていったのです。

この時代は、どのような立場の人であっても国内外の動きから足下にいたるまでの情報をいかに獲得し、先を予測して、的確な状況判断をしていくかが試された時代であったのかもしれない。幕末維新期は、現代社会を生きるために必要なことを示してくれているのではないのでしょうか。

(阿比留)



写真4 長州踊り  
〔「征長一件」毛利家文庫  
山口県文書館蔵〕



写真5 長州おはぎ(復元) 毛利家の家紋「一文字に三つ星」と反幕勢力としての長州藩の「萩」を暗示。藩の石高「三十六万石」にちなんで三十六文で売られた。幕末の京都で流行。買う際、「まけてくれ(安くしてくれ)」「いや、まけん(安くしない)」とやり取りした。(『幕末・維新时期長州藩の政治構造』三宅紹宣著 参照)

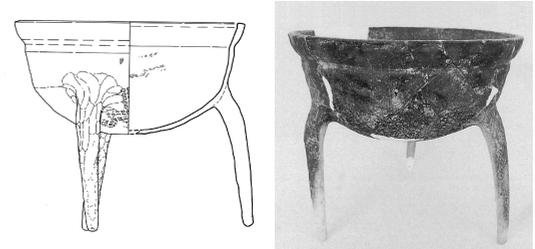
中世部会

中世の足鍋

下の写真と実測図は、中世に使用された足鍋（三本の脚の付いた土鍋）です。防府市西部の岩淵遺跡や原遺跡からは、足鍋などの瓦質土器を焼いた窯跡も発掘されています。

これらの地で生産された足鍋は、宮市（防府市）の商人によって、県域を中心に広く流通していたようで、宮市の商人の活動ぶりをうかがうことができます。

（担当 今地・岡本・高橋）



切畑南遺跡（防府市）出土の足鍋  
（山口県埋蔵文化財センター提供）

近世部会

瀬戸崎番所文書

萩藩では、いくつかの重要な港に番所を置き、「船究（浦究）」と呼ばれる役人が、船舶の検査や海難事故などに対応していました。

長門市仙崎の八阪神社には、神社に由来する文書のほかに、瀬戸崎の番所に伝わった文書が多数保存されています。それらの分析を通じて、不明な点の多い「船究（浦究）」の実像を明らかにしたいと考えています。

（担当 河本・江本・宮崎・下向井）



調査の様子

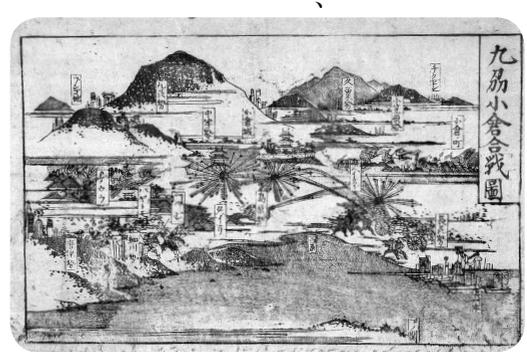
明治維新部会

幕長戦争と坂本龍馬

来年のNHK大河ドラマの主人公、坂本龍馬は幕長戦争（四境戦争）にも参加しています。小倉口の戦いでは、高杉晋作が乗船する丙寅丸が田野浦へ、龍馬が乗船する乙丑丸が門司浦へ向かい、小倉兵が守る砲台等に艦砲射撃を開始、戦端が開かれます。

また、龍馬は、関門海峡を舞台とした開戦の様子やその後の戦争の進捗状況を手紙にも残しています。

（担当 阿比留・宮本・村里）



四境戦争図 九州小倉合戦図（山口県立山口博物館蔵）

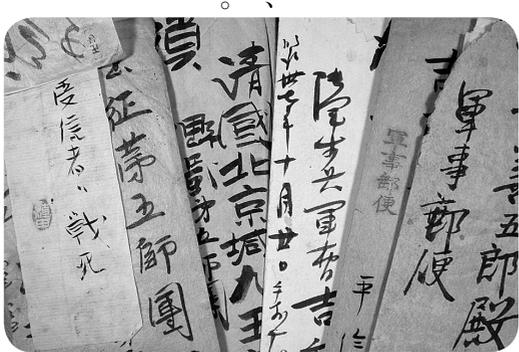
近代部会

戦場からの手紙、戦場への手紙

故郷を離れた戦地の兵士と、兵士を送り出した銃後の人々をつないだ数少ない通信手段が軍事郵便でした。

書面には、自身の無事、戦地や戦闘の様子に加え、家族や縁者への気遣い、望郷の念などがしたためられています。安否を確かめる肉親からの手紙や最期を知らせる戦友からの手紙もあり、戦争の中に身を置かざるを得なくなった当時の人々の様々な心情を読み取るこ

とができます。



軍事郵便（「吉武家文書」山口県文書館蔵）

民俗部会

**平川の隊中様**  
 山口市平川の隊中様は、脱退騒動で明治三年（一八七〇）に命を落とした振武隊士藤山佐熊を祀っています。参拝すると病気が治ると評判になり、人々が押し寄せたため、山口県は明治五年布達第五六号で参拝を禁止しました。非業の最期を遂げた人物を祀ることを御霊信仰といいます。次巻『民俗編』では、人々が死者をどのように祀ってきたのかについても解説します。

（担当 石永・古屋）



今も祀られる隊中様

現代部会

昭和史を訪ねて

岸信介、佐藤榮作と戦後二人の首相を輩出した熊毛郡田布施町では、二人が活躍した昭和の時代に思いを馳せることができます。田布施町郷土館には両元首相に関係した数多くの品が收藏され、その中には当時の外国首脳との写真や、名筆と謳われた岸元首相直筆の絵はがきなども含まれます。田布施町に昭和史を訪ねてみるのはいかがでしょうか。

（担当 津枝・山本美・林）



岸元首相旧宅

山口県 歴史モノ語り 22

よみがえる中世の土塁

周南市富田地区は、古代から海陸交通の要衝として栄えました。その富田地区に勝榮寺というお寺があります。勝榮寺は、十四世紀後半に創建されたとされる時宗寺院（現在は、浄土宗）で、旧境内は土塁や堀で囲まれていました。交通の要衝に位置し、土塁や堀で囲まれ防衛的な機能も備えているこの寺には、毛利元就や豊臣秀吉も滞在しています。

勝榮寺の土塁と堀は、中世期のいつ頃作られたものか明確なことは分かりませんが、中世の居館の遺構、あるいは勝榮寺に付随する城館的な機能を持つ遺構と考えられ、県内にも類例が少なく、大変貴重なものです。

現在、勝榮寺の土塁は復元され、土塁の外周の堀の跡は、歩道となっていますが、観世水紋様の舗装がなされ、堀のあったことを表現しています。周辺には、図書館・公民館・体育館などがあり、この地区の文化ゾーンとなっています。その一画に保存整備された土塁は、訪れる人々に、中世の富田地区の景観や歴史に思いを馳せる契機を与えてくれるようです。

歴史的遺跡・景観を現在のくらしの中に活かすことの意義を感じさせるものです。

（今地）



勝榮寺の土塁



堀の跡を示す観世水紋様の舗装

## 『民俗編』の刊行準備すすむ

現在まで二巻の『資料編』を刊行してきた民俗部会では、他部会の『通史編』にあたる『民俗編』の刊行準備をすすめています。平成二十一年度末の刊行を目指して、随時協議を重ねながら慎重に作業を行っているところです。

この『民俗編』では、「総論」、「第I編 生きる場と暮らしを築く」、「第II編 変化の中に生きる」の三つに区分して一六のテーマを配し、特に近代以降に展開した民俗を素材にして、山口県の暮らしの変化をみていきます。

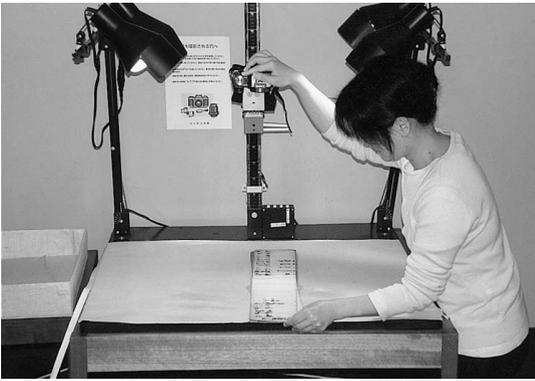
「総論」では、山口県全域に及ぶ民俗の紹介・解説を中心にしながら、『民俗編』の構成意図と全体的見取図を示します。

「第I編 生きる場と暮らしを築く」では、山口県の人々が生きて暮らしている「場」のありように注目し、その「場」がいかに作られ、継承されてきたかを民俗を手がかりに描いていきます。

〈ただいま作業中！〉



原稿の打ち込みと確認



原本照合と撮影



図版のトレース



索引の作成

「第II編 変化の中に生きる」では、暮らしに及ぶ変化に対し、人々がどのように対処し、新たな暮らしをどのように作り出しているかを具体的に明らかにします。

テーマは以下のとおりです。どうぞご期待ください。

### 総論

第I編 生きる場と暮らしを築く

第一章 自然の民俗

第二章 ムラの仕組みと相互扶助

第三章 暮らしの言葉

第四章 暮らしの形

第五章 人間・道具・環境の相互関係

第六章 男の役割・女の役割

第七章 生老病死の民俗と人生の危機管理

第八章 死者と祀り

第II編 変化の中に生きる

第一章 農に生きる

第二章 生活改善と村の暮らし

第三章 島の暮らしと娯楽

第四章 踊りの伝承

第五章 故郷の民俗

第六章 巨文島生活記

第七章 暮らしと民俗の行方

(石永)



## 周防大島町郷土探索会

この会は、平成十六年、大島郡四町の合併を機に会員一五名で結成された。会の目的は、史跡などの文化財を再発見し文化遺産を愛護・保存することにある。活動の舞台は、今まであまり探索されていない大島郡全域の山岳が中心である。

取組としては、まず古文書を調べることから始め、古老による口碑などを参考に、等高線地図をもとに現地形を把握し踏査にあたる。比高の低いところは今までよく調べられているが、高所については島民の話題にのぼる程度で実際には現地調査がされていないことが多い。具体的には、年次計画を立てて次のような企画に取り組んでいる。

- ・ 戦国時代に思いを馳せることができる山城の遺構調査
- ・ 伊予灘側の山頂や岬に六か所ある狼煙場跡の調査
- ・ 山頂近くの巨岩の洞穴を利用し観音様が祀られている岩屋の調査
- ・ 大師堂遍路道（「周防大島八十八か所」の整備 など）

活動が達成されたときは会員同士喜び合うことが楽しく、結果は毎年山口県文化財愛護協会に報告書として提出し、調査結果の発表による関心を喚起し先人のいきざまを考察している。

- ・ 活動の課題としては、
  - ・ 危険を伴う山岳調査の安全確保
  - ・ 標柱や看板等の設置資金の工面
- などがあげられる。

事務局 大島郡周防大島町西屋代

一七六一

代表 中原 勲



宗岡城跡にて

## お知らせ

▼今後の配本予定の四巻についてお知らせいたします。

### 県史刊行の

『史料編 近世5』は、山口県の近世の文化に関する史料を収録します。文化の多様な面をとらえ、萩藩に徂徠学をもたらした山縣周南の著作、藩政の実務担当者の政治論、藩校明倫館の創設、武家や商家に残る家訓、宗教に関する藩の記録や寺社文書、朝鮮通詞の養成と朝鮮情報、萩住吉祭祀、絵画の雲谷派や萩焼・須佐唐津焼の焼物師の活動、美濃派の俳諧などを取り上げています。

『史料編 幕末維新4』は、江戸幕府の崩壊過程で重要な転換点となった慶応二年（1866）の幕長戦争（四境戦争）に関して、慶応期に藩主の側近として藩政の中枢に位置していた柏村数馬の日記をはじめ、長州藩の戦闘状況を把握するために、有用な「四境戦争一事」など長州藩が記録した戦闘報告や従軍した諸隊の日記を収録しています。また、戦争の実態を客観的かつ多面的・総合的に把握できるように幕府軍側の史料や民衆の動向を知るための史料なども収録しています。

『史料編 近代2』は、大日本帝国憲法制定時から第一次大戦終了までの時期をおおまかな対象として、県政の推移、県民生活の様相を伝える史料を収録しています。

日清戦争・日露戦争が山口県に与えた影響、地方改良運動と県政の展開などのテーマのもと、明治の山口県をさまざまな角度から紹介していきます。



柏村日記  
(毛利家文庫 山口県文書館蔵)

**山口県史の構成・刊行計画 (全41巻)**

【通史編】 6巻

既刊 原始・古代  
 中世  
 近世  
 幕末維新  
 近代  
 現代

【民俗編】 1巻

【史料・資料編】 33巻

既刊 考古1 (原始)  
 既刊 考古2 (古代以降)  
 既刊 古代 (古代史料)  
 既刊 中世1 (記録)  
 既刊 中世2 (県内文書1)  
 既刊 中世3 (県内文書2)  
 既刊 中世4 (県内文書3・県外文書・文学資料)  
 既刊 近世1 (政治1)  
 既刊 近世2 (政治2)  
 既刊 近世3 (経済1)  
 既刊 近世4 (経済2)  
 近世5 (文化)  
 近世6 (諸家文書1)  
 近世7 (諸家文書2)  
 既刊 幕末維新1 (政治・社会1)  
 既刊 幕末維新2 (政治・社会2)  
 既刊 幕末維新3 (政治・社会3)  
 幕末維新4 (政治・社会4)  
 幕末維新5 (経済)  
 既刊 幕末維新6 (軍事)  
 幕末維新7 (文化・海外資料)  
 既刊 近代1 (政治・社会・文化1)  
 近代2 (政治・社会・文化2)  
 近代3 (政治・社会・文化3)  
 既刊 近代4 (産業・経済1)  
 既刊 近代5 (産業・経済2)  
 既刊 現代1 (県民の証言 体験手記編)  
 既刊 現代2 (県民の証言 聞き取り編)  
 既刊 現代3 (言論・文化 プランゲ文庫)  
 現代4 (産業・経済)  
 現代5 (政治・社会)  
 既刊 民俗1 (民俗誌再考)  
 既刊 民俗2 (暮らしと環境)

【別編】 1巻  
 年表

山口県史だより 第26号  
 平成21年12月25日発行  
 編集・発行／山口県史編さん室  
 〒753-8501 山口市滝町1番1号  
 TEL 083-933-4810  
 FAX 083-928-2705

『民俗編』は、「第I編 生きる場と暮らしを築く」、「第II編 変化の中に生きる」という二つの大テーマに基づく一五章に、「総論」を加えた全一六章構成とし、山口県民の暮らしぶりの特徴を、民俗を手がかりに浮き彫りするものです。民俗の全国的な様相と近現代の動きを視野に収め、分りやすい表現方法を用いて、山口県の民俗を具体的・分析的に記述し、民俗から捉えた暮らしの変化とその様相を提示します。

どうぞご期待ください。



別府念仏踊

**こちら 県史編さん室**

▼去る九月十二日、山口市の「山口県教育会館」を会場に第一八回山口県史講演会を開催しました。講師は、山口県史編さん専門委員の徳丸亞木先生（筑波大学教授）で、「森」と神と人―山口県における「森神信仰」―と題して講演されました。この講演の概要は、来年三月発行の『山口県史研究』第一八号に掲載する予定です。

▼『山口県史』及び『山口県史研究』のお申し込みは、左記あてにお願いいたします。

〒753-1850-1 山口市滝町一番一号 山口県刊行物センター内  
 山口県刊行物普及協会 電話 (〇八三) 九三三―二五八三  
 FAX (〇八三) 九三三―九一三九



講演中の徳丸先生